



TITLE:

Direek Chaiyanaam, Thai kab
songkhraamlook khrang thii
2,Bangkok : Prae Pittaya,
1966,1147p

AUTHOR(S):

矢野, 暢

CITATION:

矢野, 暢. Direek Chaiyanaam, Thai kab songkhraamlook khrang thii 2,Bangkok : Prae Pittaya, 1966,1147p. 東南アジア研究 1967, 5(3): 652-652

ISSUE DATE:

1967-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55412>

RIGHT:

Direek Chaiyanaam. *Thai kab songkhra-amlook khrang thii* 2. Bangkok: Prae Pittaya, 1966. 1147 p.

本書の題名は、「タイ国と第二次世界大戦」の意味である。そして、著者の Direek は、32年革命以来、タイ政界で活躍を続けてきた文官政治家として著名である。外交官歴も長いので、国際的な知名度も高く、そのかれが、このような本を著わしたと知ったら、いちおうの関心を示すものは少なくないはずだ。

たいへんな力作である。大戦直前のタイの外交関係の説明にはじまり、戦争開始後タイの辿った親日化の過程、そして戦後の自由陣営との接近の過程が、こと細かく解説されている。あえて「分析」とはいうまい。事実の羅列は、タイ人特有の *dilletantism* 好みがなくなる限り、どうにもなおらないだろうから。しかし、あわせて1000ページ以上に及ぶ2巻本に、戦争当時のタイが辿った公式外交路線の解説と関係資料がぎっしりと収められているのだから、有益でないはずがない。

本書が無味乾燥な公式記録集纂に堕さなかった理由は、著者自身にとって、戦争当時および戦後のある時期が、ある種の感慨をもって思い起こされる時期だからである。政治家としての Direek が、もっとも華やかな脚光を浴びたのはその頃ではなかったか。従って、本書のある面は、Direek 自身の回顧録でもあるわけだ。かれが1947年2月に Thamrong 内閣を辞任した理由については、当時いろいろ憶測がなされたが、本書において、かれは当時のことをくどく回顧し、理由づけを試みたりしている (pp. 679~708)。だからかれの自叙伝風な個所は、政治史の資料として貴重である。

この本のような力作が、タイ人の手によってどんどん書かれるようになると、タイ研究はもっとおもしろくなることだろう。ふつう、タイの現代政治史研究に役に立つ本としては、匿名のジャーナリストのあやしげな政治論か、さもなくば政府の刊行する公式文書か、そのいずれかしかない。実際政治に関与した政治家は、めったに文章を書かない。この本はその点貴重な例外なのである。

本書全体が貴重な資料の宝庫であるが、なかでも、ふんだんに引用されてあるたくさんの手記や文書の

なかには、ふつう入手できないものもあって（たとえば、pp. 341~474 に引用されてある、戦時中のタイ国内事情を描いた3人の政治家の手記）、この上なくありがたい。

もっとも、いうまでもなく、これも欠点のない本ではない。この本だけで、第二次大戦前後のタイのすべてがわかるとは考えられない。派閥政治を特徴とするタイでは、1人の政治家が知りうる事実は限られている。それに、著者自身、その間駐日大使や駐英大使をしたりして、限られた経験しかもてなかった事実も考えねばならない。また、人間心理や動機が描けていない点に大きな不満が残る。しかし、文句はいうまい。とにかく得難い貴重な本なのだから。

(矢野 暢)

Gordon Young. *Tracts of an Intruder*. London: Souvenir Press, 1967. 191 p. + 12 photographs.

ここで言う“an intruder”とは、著者自身のことを言う。「自然につけられた跡で、生き物が残した跡に対し、人間が残して行った足跡やナイフのキズは“intruder”の跡である。」という意味の Lahu-na 語の歌から取られたものである。題名からも分かるように、本書は学問的な研究書ではないけれども、著者の北タイの山地民（主として Lahu 族）との生活が生き生きと描かれていて、非常に興味深い本である。著者はその“Hill Tribes of Northern Thailand”により日本の研究者にも広く名を知られているが、本書は前者とは趣を異にし、北タイの山岳地帯でラフ族の友人とともに行った狩猟旅行に関する九つの話から成る。したがって、文化人類学や言語学の本ではないが、それだけに山地民の性格、移動、村の様子などが、単なる研究者としてではなく、彼らの仲間の1人として、生き生きと描き出されている。すでに知られているが、著者は中国雲南省の Lahu-na 族の村で生まれ、英語よりも Lahu-na 語を先に覚えるほど山地民と密接な生活を送り、ビルマ、アッサム、インド、ヒマラヤを経て、現在は北タイのチェンマイに住み、USOM の山岳民族のエキスパートとして働いている。考えて